

# 國學院大學學術情報リポジトリ

昭和戦前期の神道・国学と社会に関する一考察：  
藤澤親雄の西欧政治思想・國體思想を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上西, 亘 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001009">https://doi.org/10.57529/0002001009</a>

# 昭和戦前期の神道・国学と社会に関する一考察

——藤澤親雄の西欧政治思想・國體思想を中心に——

上 西 亘

## 一、はじめに

本稿の目的は昭和戦前期の神道界と社会情勢を検討するにあたって、当時多くの学者が試みた、「國體」という概念や、国学者の再評価の動きなどを非常時体制に移行しつつあった「戦前期」という時代を考慮に入れつつ、藤澤親雄の著作を通して、その思想形成・発展を考察し、昭和前期の神道と社会の関係を再考する足掛かりとすることにある。

「昭和戦前期」の特徴として、他領域の学者が、時局を鑑みて、専門領域に織り交ぜて国民・国家論を展開するという論考が多く見られる。それは、戦局の拡大に伴って一般書籍・雑誌にも登場し、「流行」していく。ここでは、筆者の主な研究対象である幕末・維新时期の国学者の「再評価」および「再顕彰」がなされ、昭和前期の様々な論考に縷縷見られていくこととなる。<sup>②</sup>かかる時局、世相が相俟って、今日、当該時期を取り上げると、一様に「オカルティ

ズム<sup>(3)</sup>」や「ファシズム」と一括りで語られ、思惟の詳細を分析した論考は思いのほか尠い。しかし、昭和前期の思想を語るにおいて、これまで研究の対象として見られなかった人物においても、当時の影響力を鑑みて前後の時代状況や思想の推移などを丹念に検証・比較し、再検討する必要がある。当該時期の近代日本思想史研究上欠かせないものであると筆者は考えている。

## 二、藤澤親雄研究の意義

今回、藤澤親雄を取り上げたのは、大國隆正という近世における国学者・神道思想家の営為に影響された人物という枠組みのみならず、「超国家主義」を展開する、「時局」に直面した学者であり、なお且つ当時の思想界に大きな影響力を行使し得る位置を確保していた人物によって、どのように「再評価」「再検証」がなされていくのかを明らかにすることが、戦前期の神道・国学と社会の相関関係を理解する上での一つの視点となると考えるからである。

では、昭和戦前期の神道・国学と社会を考える上でなぜ藤澤をとりあげるのかについて、その履歴等を紹介することにより、明示しておきたい。藤澤は、明治二六（一八九三）年九月一八日、帝国大学理科大学教授の数学者藤澤利喜太郎の長男として東京小石川に生まれ、開成中学、第一高等学校へと進み、大正六（一九一七）年東京帝国大学法学部仏法科を卒業。卒業後に高等文官試験に合格し農商務省に入省、商工局工場監督官補、特許局審理官（叙従七位）を経て、満鉄東亜経済調査局職員となり、外務省事務官等を歴任。大正一〇年一月に外務事務官（叙高等官七等）に任ぜられ国際連盟事務局員と兼務、大正一一年には同事務局情報部次長に昇格する。その後、文部省在外研究員としてドイツに留学するなど、海外情勢にも通じた人物であった。帰国後は豊富な海外経験と語学力を評価され、大正

一四年には東京帝国大学にて国際連盟に関する講義を持ち、同年九州帝国大学に法文学部が新設されるにあたって同大学の教授に就任、昭和六（一九三一）年に同大学教授を辞して同七年に文部省国民精神文化研究所嘱託、同八年に海軍省嘱託、同一〇年大東文化協会理事兼大東文化学院教授、同一二年内閣情報部嘱託（正六位）、同一三年日独同工会思想部長となるなど、政治学者として斯界に大きな影響力を持つ人物であった。<sup>⑤</sup>

藤澤の近代政治思想における主張は、英米を中心とした西欧を中心とした自由主義社会や資本主義社会に対する激しい排撃と、ソ連を中心としたマルクス主義政治体制批判が主であるが、戦局が拡大するにつれ、西欧と日本の政治比較論にとどまらず、日本の国柄である「國體」を説明すべく、所謂「偽書」とされる資料や、当時学問的に否定されていた神代文字の考察を行うようになる。更に、契丹と日本民族が同祖である論や、ミュウ大陸（ムー大陸）が記紀神話における国生みの際に生まれたものであるとするなど、次第に「超古代」的文献や伝説を用いた「超国家主義」（ウルトラナシヨナリズム）論者へと変化し、精神論が主張の中心に置き換わるようになる。

藤澤は、この「超国家主義」の学問的根拠に、国学者の「言霊学」や「神代文字」など、学問的に否定されている言説を用い、あらゆる民族の根源に日本人があることの証左とした。例えば藤澤は、日露戦争時に鴨緑江軍兵站経理部長（後に陸軍主計監まで累進）であった浜名寛祐が入手した、明治三八（一九〇一）年に奉天にて発見された『契丹古伝』に記載されている古代民族「東大神族」（シウカラ）の存在を典拠として、日本・満州・中国・朝鮮民族は元をたどれば同祖であり、その証左に「神代文字」の多様性を説き、各文字や言語が日本を起源として展開されたと述べる。國體の「学問的」根拠を求めるとき、大國隆正の造化三神の神觀念（「産霊」の働き、「家職産業論」等）に影響されたと思われる箇所や、所謂万国総帝論を引用し、「大東亜共栄圏」建設の理論的根拠の一つとして位置づけられている。<sup>⑥⑦</sup>

かかる藤澤親雄の思想に関する先行研究は数えるほどしかなく、大谷伸治や今井隆太が論及している位である。大谷は藤澤を政治学の面から多くの著作にあたって考察を加えているが、大谷は政治学、政治思想の面からの言及であり、藤澤の神道説に關しては言及・分析はされていない。というのも、藤澤が重視した「産霊の働き」の理論を「個別的作用（個人主義）」と統合化的作用（全体主義）を総合し「道」や「産霊」という日本的・東洋的な言葉を冠しながらも、西欧的な政治思想とほぼ同一のものを説いていた<sup>10</sup>と大谷は指摘しているが、この時期の藤澤の政治体制や政治思想を論じた著作を語るには、藤澤の述べる西洋思想と関連付けて日本の國體を論じるという形式のもととなる、藤澤の天皇観・神道観・國體についてこそ考察を加えねばならないからである。

以上の問題点を念頭に置きつつ、まずは国民精神文化研究所嘱託となつた昭和九（一九三二）年を起点とし、日米開戦前後迄の著作を通じて、藤澤の政治思想を概観し、考察を試みたい。

### 三、藤澤親雄の政治思想研究の変遷 —それぞれの著作の性格—

先述したように、藤澤は国際連盟での経験や文部省在外研究員としてドイツに留学するなど海外での豊富な知識を通じて、西欧近代思想と日本の國體あるいは皇道との比較を試みている。藤澤の著作は多岐にわたるが、なかでも西欧の近代政治思想を考察した上で、日本と比較検討した著作を時代別に見ることににより、藤澤の政治思想にいかなる発展・変遷が見られるのかを考察することとする。

まずは昭和八年三月三十一日に刊行された『西歐近代思想と日本國體』<sup>11</sup>を見てみることにする。

## ① 『西歐近代思想と日本國體』

『西歐近代思想と日本國體』において、藤澤は西歐諸国哲学界の傾向として、ドイツの哲学者カール・ヤスパースの論を引用し、「近代人は一つの限界的状态 (Grenzsituation) に在る……從來生活様式及び思想生活に對して根本的な懷疑を持ち、突如として極度の精神的不安に陥つてゐる」と、第一次世界大戦後の西歐と中心とした民衆をヤスパースの基本概念である所謂「限界状況」に陥っていると指摘し、従来型の個人主義に立脚した前近代的な政治体制には限界があると論じている。<sup>(16)</sup> このように社会が不均衡であり且つ、人類史上初の大規模戦争となつた第一次世界大戦の主戦場であつた当時の欧州情勢下にあつて勃興した政治思想 (ボルシェイズム、ファシズム、ナチス運動) について藤澤は解説を試みる。

まずボルシェイズムについて藤澤は論じることが、まずは藤澤の理想とする政治のあり方について理解する必要がある。それは、国家に属する人間が宗教的信念と倫理的情操と生物的欲望衝動が本末の關係によつて一体となる關係が最も望ましい姿であるとする<sup>(17)</sup>。そして、抽象遊離する人々と宗教 (眞の權威) が共存し、連関することによつて初めて本来の国家としての政治体制が機能するという考えが前提にあることを、まずは注意せねばならない。ボルシェイズムは、個人主義の限界を示す政治体制としての「現実的解決策」の一つと藤澤は指摘してはいるが、同時に個人主義の誤つた「発展・変化」の形であり、自然の摂理と合わない非常に危険な思想であることを詳細に論じている。

第一に「搾取なき社会の実現」を志向し表面的には正常に政治システムが履行されている様には見えるが、実際には新たなプロレタリア階級の一握りの存在である共産党幹部によつて支配され、大多数の労働者階級は絶対的な服従を強いられる新たな暴力支配階級が誕生したに過ぎない事を示唆し、その構造を「新たな奴隸制度の復興」と断じている。<sup>(18)</sup> 具体例として藤澤はスターリンの五カ年計画に言及する。すなわち、「現在ソヴィエト・ロシアの獨裁者スター

リンは、五カ年計画の實施によつて大衆の希望をつながらんと慾してゐる。然れども、ロシヤの經濟狀況は頗る悪化し、生産は減少し、貧困は一般化し、一般の大衆は絶ち難き生活不安に陥つてゐる。只僅かに共產黨の壓迫によつて事なきを得てゐる状態である。<sup>(16)</sup>と共產主義に基づくソ連の失政について紹介する。

第二に宗教を排除する政治体制は藤澤にとつて到底相容れるものではなく「思ふに、ソヴィエツト國家の指導原理たるマルクス共產主義は、唯物的人間觀の偏狭なる立場に執着し、すべての社會現象を唯物經濟論と階級闘争論の見地より解釋せんとするものである。従つて、ソヴィエツト國家に於て、宗教は阿片の如きものとして否定せられてゐる。又深き形而上的な根據を有する人間のアプリオリな道德的情操を不當に無視してゐる。」<sup>(17)</sup>としてマルクス主義の構造的な欠陥を示している。

第三に自然の摂理に反することを親子の繋がりを例示として以下のように述べる。「…親と子の間に於てアプリオリに發生する深き道德的情操關係は、ブルジョアのセンチメンタリズムとして否定せられる。そこには、親が子に對する本質的な慈愛も、子が親に對する極く自然な恩誼も否定せられる。併し、親子の愛は人類道德の基調を構成するものであるから、之を否定して、眞なる意味に於ける人類愛を實現せんとする事は不可能である。」<sup>(18)</sup>このことから、先述した藤澤の理想とする国民・國家の理想像とボルシェイズムは大きくかけ離れた思想であると言える。近代において死や苦痛、争鬭や原罪など、最早西欧近代人は従前の方法では現況を脱することの出来ない「限界狀況」にあり、人も國家も構造的・思想的變革を迫られている状況において、民族に先天的に存在すべきである普遍的に有するものがボルシェイズムにはないという違和感を「親と子の人倫關係を幾ら機械的な個人主義的な關係に解消し、その間の關係は單なる利益交換關係であると理論づけた所で、依然として我々は道德的志向性は繼續してゐるのである。…ボルシェイズムは搾取なき理想社會を夢想するものに違ひないけれども、その指導原理たるマルクス共產主義は、部分

人的觀念たる個人主義の域を脱してゐない。従つて「分裂より統合へ」「末梢より本幹へ」の傾向を強く示してゐる現代人の精神的要求にびつたりと來ないのである。<sup>(19)</sup>と論じている。

これらの論をハイデッガーの理論に關連付け、「ハイデッガーは端的に人間はゾルゲであると言つてゐる。此の場合のゾルゲは、志向性と同じ意味であらう。故に、人間の地的ゾルゲのみを肯定して不自然に天的なゾルゲを否定する事、或いはその逆をする事は、共に人間の本質構造を強ひて分裂せしめる事であり、眞理に反するものと言はねばならぬ。<sup>(20)</sup>」と述べ、宗教或いは神を欲求する天的なるものへの志向性と、経済活動や生産活動に代表される地的なるものへの志向性という人間本来の欲求の一方を湮滅させる偏つた人間觀を構成せしめるマルクス主義に対し藤澤は疑義を呈している。

以上、藤澤のボルシェイズムに対する論点を見てきた。藤澤は、ボルシェイズムを従来の西洋の政治思想や体制への限界から生み出された新しい政治思想的試みであるとしながらも、搾取なき社会を夢想するが、結局は新たな支配構造を創出したに過ぎない事、そして人間に密接不可分な宗教的背景を一切否定する政治思想である事、そして道德や倫理など人間あるべき姿にそぐわない社会構造が生まれるという、大きく分けて三点にボルシェイズムの問題点を指摘していると筆者は考える。<sup>(21)</sup>次いでファシズムについて藤澤はどのように位置づけているかを見てみることにする。

ファシズムに関しては、「經濟的なるもの、土臺より出發して、遂に宗教的なるものに至り、新しき意味に於ける天地人の世界觀を自己の指導原理とする政治運動及び社会運動<sup>(22)</sup>」であり、同じく近代における限界状況から生み出されたマルクス主義とは異なることを藤澤は、「ファッショ革命は、精神的革命であり、政治的革命であり、又經濟的革命である。それは、百姓や奴隸の一揆、または不満なる群衆の憤懣の爆發と云ふが如き低級なる革命とは異なる。」<sup>(23)</sup>としてイタリアで起こつた所謂「フィウメ」問題やフランス革命のような暴力的革命とは一線を画す運動であること

を力説する。イタリアにおけるファシズム理論の誕生について解説をした上で藤澤はファシズムの特徴を「ファッショ國家は第一に宗教的な基礎を有する理想主義國家である。第二にそれは政治的責任と訓練と上下の秩序を重んずる權威的國家であり、第三にそれは勞資の鬭争を止揚せんとするものであつて、經濟的に組合國家 (la corporazione) である。即ちファッショ國家は、ヂエンチイレ (イタリア文部大臣ジョヴァンニ・ジエンティレのこと——引用者註——) の説くが如く、マルキシズム又は社會主義的觀念並に自由主義的觀念の反定立として生まれたるものである。」と規定している。末文には日本とファシズム運動との関連性について「ファッシズムは飽くまでもイタリアといふ土臺から生まれたものであつて、之を直ちに移して土臺が全く違ふ日本に實行しやうとする事は非常に危険である。後に述べるやうに、我が日本に於いては、ファッシズムが究極に於て達せねばならない王道主義の尤も醇乎たる形態である皇道が實踐せられてゐるのであるから、今更ファッショなどを特に輸入する必要は毫もないのである。」と注目すべき一言を付け加えている。

ナチス運動に関しては、「無名の青年戦士アドルフ・ヒットラーによつて率ひられるドイツ國民社會勞動黨は、ファッショ的なる原理によりてドイツ民族の精神的更生を行ひ、且つドイツ大衆の生活を安堵せしめんと欲するものである。ヒットラーは、今や全ドイツの政局を左右し、且つ世界の國際政治に新しき方向を示し得べき帝國宰相の印綬を帶ぶるに至つた。かれは、ドイツ民族をしてそれに共通なる民族的精神と特性を意識せしめて、一大大同團結を圖り、ドイツ民族をしてその文化的政治的並に經濟的なる天賦の使命を全うせしめんとするものである。」<sup>(27)</sup>ことが運動の發端と規定し、その究極的觀念が「ヴェルサイユ條約の廢棄」、「大産業資本の国有化」、「マルキシズムの世界觀を排撃」することを目的としていと述べると述べる。<sup>(28)</sup>

これら新しい政治思想を藤澤は以下のようにまとめている。「……イタリアのファッシズムを率ゐるムッソリニと、

ドイツに於けるナチスの首領たるヒットラーが目指してゐる理想が、ボルシェビズムのそれよりも高いものである事を看取し得たであらう。この二人の宰相は、共に大衆の中より現れたる無産者であつて、しかも民族の精神的更生による國民全體の結合融和を主張するものである。故に、彼等は偏狭にして奇矯なるマルクス主義的階級觀を排撃して、すべての社會層の無理なき協調と調和とを主張するものである。<sup>(29)</sup>と。そしてファシズムとナチス運動と、我が国の皇道の比較を試みる。藤澤の規定する皇道とは「天皇を中心に仰ぎ奉る我國に於て實踐的に發展し來たれる、具體的なる歴史的事實であつて、抽象的なる政治理論ではない。皇道は、実に我國に於て如實に實踐し來れる東洋政治の理想たる王道の真髓であり、精華である。」とする。また、「皇」は百から一を差し引いた数の最も大きなもの「九十九」（つくも）を現しているとし、「白の字は、日輪の象形より出づるものとの主張をなすものがある。是等の諸説を綜合して考へて見ると、皇という文字は、太陽の如く光と徳と力を與へる大なる王と云ふが如き意味を有しているのはあるまいか。この獨斷的なる私の解釋は、我國が日本即ち日の本であると云ふ意味と關聯せしめて深き意義を有し來るのである。」と推測し、わずかながら當時の藤澤の神觀・天皇觀をうかがうことができる。その後の説は『易経』を核とした太極と陰陽二元に基づいた天の思想と、『大學』に基づいた仁に基づく政治の王道を説明することに終始している。中でも着目すべきは、天なるものと地なるものが結びついているものが人間觀の理想とする考えを「この世界に於て最も優れたる東洋政治は、我國の歴史に於て如實に實踐せられて來た。我國では天（高天原）と人（萬世一系の天皇）と地（豊葦原瑞穗國）とを貫く線が、日本歴史に外ならぬ。之が即ち皇道である。」と説明し、これら皇道を人為的に実行させようとして起こつた運動が、ファシズムであり、ナチスの運動であり、彼らの争闘主義と覇道主義の行き着くところは「治国平天下」であり、皇道の国日本と理想を同じくすることであると結んでゐる。次いで、昭和一〇年三月八日に発行された『近代政治思想と皇道』<sup>(30)</sup>を見ていくこととする。

## ② 『近代政治思想と皇道』

主張するところは『西歐近代思想と日本國體』と重複するところが多いが、西欧近代思想と皇道との比較をより鮮明に引き出している。ファシズムにおいても「ファシズムは飽くまでもイタリアといふ土臺から生まれたものであつて、之を直ちに移して土臺が全く違ふ日本に實行せんとするのは非常な誤りである。日本に於いてはファシズムが究極に於いて達せねばならない王道主義の最も醇乎たる形態である皇道が實踐せられ來つたのである。」とほぼ同様の結論を導いている。しかし論に發展が見いだせるのはムッソリーニと天皇との歴然たる差異を論じている点にある。すなわち、ムッソリーニは精神的指導者として全イタリアを統一したとしても、宗教的信仰の対象とは成り得ず、權威的国家として自らの国を位置づけるのであるとするならば、イタリア国王の存在も無視できず、藤澤の重視する天たるものと人とを結ぶものとして、畢竟重んじられるのは、ヴァチカンにいるローマ法王となることを指摘している。<sup>(36)</sup>

また、国民の精神的統一についても皇道に比してファシズムは遙かに基礎薄弱であると論じる。日本は國體として既に君臣の道が備わっていることを、「我國の大家族國家の基本的道德たる「孝」と國家の基本的道德たる「忠」が最も完全に一致するのである。従つて君臣關係も一面「義は君臣」であると同時に他面「情は父子」となる。詳言すれば純眞なる親と子の愛たる孝がそのまゝに擴充されて臣民が天皇に對する至誠の情緒たる忠となるのである。この忠孝一致こそは我が國體の精華であり、我が國民の精神的統一を益々鞏固ならしめる所以である。」と述べる。<sup>(37)</sup> それに対してイタリアは「之に對してファシズムに於いては國民の精神的統一を遠い「ローマ帝國」への追想に求める外はない。彼らと言ふ「イタリア人はイタリア統一及びローマを王國の首都と定めると宣言した時に続く数十年を忘れてはならない。當時イタリア人の國民的自覺は過去の歴史に照らされて成熟したのである。過去の歴史即ちロー

マの軍事的政略、ローマ法の尊嚴、過去數代の國民的勞作と遺業こそこれである。ローマの追憶はイタリー國民主義の中心である」と。斯くの如く單なる古代への追想と感激による國民の精神的統一は皇道に於ける現實的な統一に比して遙かに弱い事は言ふまでもない。之を要するに權威國家の理想はイタリーに於いて完全に實現する事は困難である。眞の權威國家の實現は我が國の如く萬世一系の天皇を戴く家族的國家に於いてのみ可能である。」<sup>(38)</sup>としており、一旦途絶した帝國に精神的復興を図るという点で明らかな違いが有り、違いが有るが故に日本に敢えて取り入れる必要の無い政治思想であるという主張は『西歐近代思想と日本國體』から一貫している。

ナチス運動に関しては『西歐近代思想と日本國體』より更なる論及がなされ、国家主義と國民主義との違い、ドイツが内在的に抱える問題とナチス運動がどのように関係しているのかを端的に述べている。<sup>(39)</sup>また、ナチス運動にも左派と右派が拮抗し、完全なるヒトラーの独裁体制とは必ずしも言えない所があると指摘する。<sup>(40)</sup>また、必然極端な国粹主義と拡大主義を表に出すと、覇権主義的国家体制にならざるを得なくなり、日本と比べて内にも外にも構造的な不安を有しているという興味深い指摘がなされている。<sup>(41)</sup>

ナチスと皇道に関しては、「ナチスは組閣以來自己の主張を貫徹する爲には言論を壓迫彈壓し、一國一黨を實現する爲には強力を行使して反對黨を解體し、獨裁權獲得の爲に反對黨議員の登院を拒絶し、鞏固なる中央集權を斷行するためには假借する處なく地方政權を奪取した。蓋し權威と自由の調和を目標とするナチスを甚だしく權威偏重に赴かしめたのは次の理由によるのである。第一に西歐の社會は一度完全に個人主義化されたのであるから、此の傾向を根本的に改めて全體主義を樹立することは困難である。第二に民族精神が極く自然に結晶して出來上つた共同社會的家族國家は西歐には一つも存在しない。従つて日本の如く萬世一系連綿として皇位の存続した國はなく何れも革命につぐ革命を以てした國である。ヒトラーは現在ドイツに於いて壓倒的勢力を有するが何時打倒されるやも保し難い

のである。第三にヒットラーはフューラーと呼ばれ國民の大部分の精神的指導者と目されて居るが、尚ほ多くの政敵を有し又その政策實行にもつても往々暴力すら行使してゐる。従つて「仁者に敵なし」と言ふ意味に於ての最高精神的指導者となる事を得ない。ナチスに於ては血族國家に對する要求が極めて熾烈である。ヒットラーは人種混合の結果は第一に優良人種の水準が低下し、第二に其精神力並に體力が退化するが故に、純血を尊重せねばならないと主張してゐる。所が現在の獨逸國民はゲルマン人種、スラヴ人種、ケルト人種、ラテン人種等々によつて混成されてゐる。然るに我が國に於ては「國家は家でなければならぬ」と言ふナチスの理想が具體的に實現されてゐる。元來日本民族は天孫民族より發祥せるものであつて、其共同祖先の直系の御子孫が皇室に當らせられ我々子孫は皆その分家別家の末孫である。日本はかくして現實に於て血と血を以て繋がれたる一大家族國家である。ドイツに於てはナチスの望むが如き純粹なる血族國家を建設する事は殆ど不可能である。故にナチスはドイツを精神的に統一せしむる必要上、極端なる國粹主義を鼓吹せざるを得ない。」と指摘し、ナチス体制の潜在的問題と、國家維持の困難さを日本の民族と政治体制と比較して指摘している。

### ③ 『日本の思惟の諸問題』

『日本の思惟の諸問題』は昭和一六年六月二五日に發行された。マルクス主義に影響された学生の左傾化を懸念し、思想善導を目的として設立された國民精神文化研究所の研究囑託として、また西歐事情のオーソリティーとしてイタリアのファシズムとドイツのナチズムを概観し、設立背景や思想の特色を冒頭に置く。また英米的な思惟に対しては批判的であり、自由主義的思想をマルクス主義の出発点として痛烈に批判している。

今までの著作①『西歐近代思想と日本國體』や②『近代政治思想と皇道』のように、藤澤の専門とする政治学を主

として西欧政治を論じるものから次第に、古典や儒学に視点を置き国家というものを定義づけようとしている所が印象的である。

例示すると、国の読みである「くに」は「古典の言語学的研究を総合して考察」すると「きね」の発音が転じたものであると藤澤は指摘する。<sup>(43)</sup> その「ね」は根本をあらわす根であり、凡ての心神の根基を示すものであり、根は根拠根底で「き」は元來人間の有する活気、元氣の「き」の音であり、「人氣」の「き」を表すようなものであるとする。<sup>(44)</sup>

このような日本語の本質を考察する手がかりとなるものは「言霊」という觀念にあると藤澤は指摘する。続けて藤澤は「古來日本人は国語と云ふ客觀的なる存在に靈即ち靈妙なる創造作用が内包せらるゝものと考えてきた。これが産靈と云う日本人世界觀の據つて起こる所である。産靈とは靈が蒸す事即ち或者を醸成する事である。しかしてこの産靈の本体を象徴するものが高御産靈巢日神である。言靈及び産靈思想に依つて明かにせられてゐるが如く實際に於ても日本語の基礎構成は存在的意味を有する名詞の中に作用もしくは作きを営む動詞的なるものを含んでゐる。例へば日（ひ）と云ふ名詞即ち対象から秀づ（ひいづ）廣がる（ひろがる）引く（ひく）光る（ひかる）乾る（ひる）等の動詞的作用が発現してくる。」<sup>(45)</sup> というように一音一義説を展開していく。

他方では、「むすび」とは常に創造して止まざる宇宙的生命力を云ふ。然るに「むすび」は唯一直線に膨脹發展するものではなく一定の限度迄膨脹すると今度は反對に一定の限度迄收縮する。しかも此の相對的矛盾の繰り返しによつてのみ全體の圓滿なる生成發展が行はれていくのである。此のむすびの膨脹的作用を神格化して之を高御産巢日神と云ふ。次にむすびの收縮作用を同じく神格化して之を神産巢日神と云ふ。此の二神は結局「ひ」の本體たる天之御中主神の開顯分派作用と還元統合作用とを表現してゐる。されば古事記の冒頭に於て「天地の初發の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神」と述べてある。惟ふに我が國の神典は宇宙

眞理の象徴的啓示であつて、單なる物語りではない。<sup>(46)</sup>と隆正に影響を受けたと思われる神観を有している。何れにせよ初期の藤澤の著作には見られない「産霊」の概念や「言霊」の概念が其の論考に湧出されているのは誠に興味深い点といえる。

以上、藤澤の西洋政治思想に対する態度を著作より概観した。前述したとおり、藤澤は語学に秀で、二〇代より国際連盟の事務局員から情報部次長まで累進した国際通である。藤澤には、英米の自由主義に基づいた国際連盟の有り様は、眞の国際平和を希求するものにはどうしても見えなかつたのである。<sup>(47)</sup>次節では、日米開戦後に刊行された『世紀の預言』を取り上げ、藤澤の宇宙観・世界観に基づいた日本國體を多少なりとも明らかにしたいと思う。

#### 四、『世紀の預言』にみる藤澤の日本國體

『世紀の預言』（以下、本書）の刊行は昭和一七年三月である。本書と以前の著作の違いは、大東亜戦争の勃発によって、社会的な緊張状態にあつた時代を超え、本格的な戦時体制に移行する画期となる昭和一六年一二月以降に書かれた著作である。

前節までの著作は、藤澤がどのように西欧近代思想を意義付け、その不足を読者に伝えるがために、日本の國體と比較して、日本の國體や皇道が最も優れているかを解説したものである。つまりは、藤澤が理想とする体制に近い民族主義的思想や全体主義的思想を取り入れた、ファシズムやナチス運動が個人主義に基づく自由主義や資本主義、共産主義よりは遙かに良いとしても、それはかりそめの権威主義であり、霸道主義や極端な国粹主義であるため、政治体制を縦令プラスの方向に変化させていったとしても、それは日本の皇道に限りなく近づくだけであつて、最高の政

治形態である日本の皇道に比肩する国はなく、必然日本が世界秩序の構築者となる使命を担っていることを複数の著作を通じて論じており、その思想の変遷について知る足がかりとなった。

藤澤が本書において意図するところは、大教宣布の詔における「惟神の大道」に立ち返り、国家・国民が天皇を扶翼すべく「大政翼賛」を堅持しなければならないこと、そしてその理論的根拠に『日本の思惟の諸問題』でも言及された「産霊」の概念<sup>(48)</sup>、そして「道」という字の本義を論じ、血族・「血統」(日本民族が太古より連綿として受け継いだ記憶)として惟神の大「道」に立ち返る必要があることを述べる。

まず、藤澤の大政翼賛体制に対する態度を見ていくこととする。大政翼賛運動は「維新」であり、従来の政治体制を抜本的に改革する必要があることを、第二次近衛内閣の「基本国策要綱」を引用し展開する。根本方針は日滿支の新秩序を構築し「世界平和」を掲げ、西欧の国防国家の概念でなく、皇国的世界観における民族の精神的統一のもと、国防国家体制が堅持されるべきである事を述べる。そのためには、従来の国家体制では不徹底であり、『國體の本義』に透徹する教学の刷新を図ること、また議會制は必要としながらも、「政党政治」や「官僚政治」を排し、国民が一致して天皇の政治を翼成すること<sup>(49)</sup>によって、政治と統帥が一体化された真の国防国家体制が確立できることを述べる<sup>(50)</sup>。本書で藤澤が論ずる国防国家体制は、常態としてのもではなく、非常時における国家体制であるとし、国民が国家に対しどのような心構えで臨むべきか次のように付言する。「従来の自由主義國家觀に於ては、國家は個人の自由を保證するために存在するもので、個人が國家の基礎であつた。そこで全體生命からきりはなされた個人の生命・財産・營利・活動の自由を保護することが國家の任務であるとされた。皇國世界觀に於いては之とことなり、個人は國家あつて存在し得るもので、個人の生命財産等は國家に奉仕すべきものである。個人は強壓によらず自發的に一切を國家目的達成に捧げなければならぬ。その爲に國家は場合によつては、個人の營利に干渉し、又教育其他の生活部

面にまで之を國家目的に向かつて指導育成するものであると観するのである。<sup>(51)</sup>つまり、国防國家の要は、思想面においては、惟神の国民精神が國家の理想として統一され、國家觀に基づく國是遂行に必要な軍備が完成され戰爭遂行に欠くべからざる政治と統帥が一体化されるとし、これを維持するために經濟は國益優先に、資源は自給自足を旨とするのが良いとする。この点は「國家政治行政は独・伊の路線と似たもの」<sup>(52)</sup>でよいと藤澤は述べる。その上で同盟國であるドイツ・イタリアの全体主義的政治体制と大政翼賛体制の相違を藤澤は夫々の民族性の違いにあるとし、日本の民族性を説明するため皇國とはいかなるものであるかを論じている。次に、藤澤の皇國觀を見ていくこととする。

藤澤は、大政翼賛の精神的基礎を日本人に刻まれた民族的特徴と信仰的特徴、すなわち「天なるものと人との關係」に求める。これによって日本の政治体制はこの大政翼賛を基礎に展開するものとして導く。すなわち、「天皇歸一の大信仰を身に體して、一億國民が火の玉の如く一丸となつて挺身するとき、何ものか其の進路を阻み得よう。天皇にまつるはざる者は、此の大進撃の前に討滅され、あらゆる敵性諸國民は、翕然として此の信仰にまつるひ來たり、世界人類がやがて悉く 天皇に歸一するに至るのである。」<sup>(53)</sup>と論を進め、「天皇の天業遂行を民が翼賛し奉る」ことが肝要と規定する。

では藤澤は、「日本人」という民族をどのように位置づけたのか。藤澤は、測り知れぬ太古の時代から宇宙生命を継承し続けた民族であり、他の民族と同様祖先の生命や文化、政治・經濟を継承しているものを「民族」と規定する。藤澤にとつて歴史は悠久なる民族精神の時間的展開<sup>(54)</sup>であり、教學の刷新に必要な新しき學問の原理として、「民族の持つ内面的な宇宙觀世界觀人生觀」を構築することによって民族精神が涵養されると論じている。<sup>(55)</sup>次に本書における藤澤の産靈觀を見る。「日本神話にあらはれた皇國宇宙觀」<sup>(56)</sup>では、『日本的思惟の諸問題』で展開された説と同じく、「人は「日（靈）止」（ひと）」、「蒸す靈）ムスヒの神」といった産靈觀を展開する。同様に、造化三神の神觀念につい

ては、森羅万象の中心にある神は天之御中主神であるとし、多元的に膨張発展する遠心的作用を高御産巢日神に見出し、個性を完成した凡てのものが、再び一元的に中心に収縮還元する求心的作用を神産巢日神の神格と規定する。この産霊神の遠心と求心は「中心」となる天之御中主神によって契機となり、相互作用すると結ぶ。「宇宙人生（森羅万象）全て造化神によって生成発展する」という宇宙観を藤澤は一貫して持ち続けており、ありとあらゆるものが天之御中主神より出て来るとする説は大國隆正の造化三神の神観念に酷似している。

では、他の神をどのように考えているかを見てみよう。藤澤は伊邪那岐命・伊邪那美命を日本民族の神、日本国家の神と規定し、記紀神話に登場する所謂「人間的・有機的」なる神のあり方とキリスト教の創造主であるエホバとを比較して、超人間的な力、造主物、絶対神的性格を持つ親近感のない神に対する疑義を以下のように呈する。「西洋の作られた神、殊にユダヤ神話に於ける神エホヴァは、人間とは全然無關係な、何等の血の繋がりを持たぬ超民族超神としてあらはれてゐる。しかるに、民族を離れた「人」といふものは此の世にあり得るものではない。如何なる人と雖も、それが生まれたるものである限り、イギリス人であるか、米國人であるか、印度人であるか猶太人であるか、ともかく或民族の生命を繼承するものである。民族を離れて人はあり得ない。かくて、單なる人類の抽象神と云ふが如きは、畢竟觀念的のみ意識された神となるのである。日本の神は、抽象的に意識された神ではなく、民族の根源としての神である。民族の根源、それはまた直ちに人類の根源である。されば、日本の神は、民族の神であることによつて、そのまゝ、實は世界人類の神にましますのである。」<sup>57</sup>その上で藤澤は、天照大御神を世界秩序の中心神として位置づける。

「皇祖天照皇大神は、此の地上の統治者として、皇孫瓊杵尊を降臨せしめ、其の際に、次の神勅を下し給ふてゐる。葦原ノ千五百秋ノ瑞穂ノ国ハ、是レ吾ガ子孫ノ王タルヘキ地ナリ、宜シク爾皇孫就キテ治セ。行矣。宝祚ノ隆ヘマサ

ムコト當ニ天壤ト窮リナカルヘシ之は世に所謂「宝祚天壤無窮の御神勅」と申し上げてゐる。この御神勅によつて、我が豊葦原の瑞穂国は、宇宙の中心統治者たる 天照皇大神の血系を直系に継ぎ給ふ御子孫のみが、「きみ」として御統治遊ばす國であることが定められた。更に宇宙の中心にましまして、其の統治者たる太陽の大神の御位を、そのまま、に地上に繼承遊ばされたる「天津日嗣」の 天皇の御位は 皇孫代々之を嗣ぎ給ひ、生命の流れは、生み生まれつゝ、無窮に絶ゆることなく繼續される。実に皇孫はいやつぎつぎに榮え給ひ、皇位もいよいよ光をまして天壤と共に隆昌し給ふのである」<sup>(58)</sup>と。

最後に藤澤は日本と天皇を万国の中心と捉え、皇國たる日本が、世界を教導して真の平和を築く使命があることを次のように纏めている。

「今や我々は惟神の大道を、我が國內は勿論、廣く世界全對に宣揚すべき宣教師となり、雄渾無比の世界的大経綸を樹立して、如實に「坤輿ヲ一字」たらしめ、全人類を 天皇のしろしめし給ふ一大家族に統合しなければならぬ」<sup>(59)</sup>と。

本書以前で述べる所のドイツ・イタリアの政治体制の変化について「万邦諸民族が、夫々の民族生命に帰ることに始まる所謂「全体主義」は、究極するところ、皇國體に於て最高完全なる其の實現を見るものである。故に全体主義國家は、必然に我國と其の意圖を同じくし、遂に皇國を仰ぎ見て帰依するに至るのである。」<sup>(60)</sup>と述べることからより明確に理解されよう。

## 五、むすびにかえて

以上、藤澤の著作を通じて、その西洋近代政治思想と國體思想の関連について見てきた。その結果、藤澤の理想とする政治とは、天なるもの（神或いは宗教）と人が結びつき、地なるもの（生活活動）と共に生きる、言わば天と人と地が密接不可分な関係にあることを希求したことが明らかになったと思われる。それは、豊かな語学力と二〇代からの海外経験に裏付けされた、藤澤の西欧近代政治思想における学識を土台に、海外事情を通じて得た知見であった。この国際的な感覚と、日本の国柄の優越性を明らかにすることに終始していた藤澤の言説が、次第に天照大御神や天皇を中心とした世界秩序の構築に向け、宇宙観と皇国観が変化していく過程を明らかにすることが出来た。すなわち藤澤は、『世紀の預言』で、日本と天皇を万国の中心と捉え、皇国たる日本が世界を教導して真の平和を築く使命があると至ったのである。

こうした藤澤の思想や言説において、当時の社会的背景と藤澤の著作との関連性や、当該時期を考える上で欠かすことの出来ない青少年の思想善導について藤澤はどのように考えていたのか、今後検討すべき課題は数多く残されている。

## 註

- (1) 藤澤については阪本是丸「日本ファシズム」と神社・神道に関する素描」〔研究開発推進センター紀要〕六号、平成二四年三月）にて、藤澤親雄について言及されている箇所をテーマ設定の出発点としている。

「…現実の「大東亜共栄圏」の具現化たる「八紘一宇」は官民を問わず様々な解釈で論じられたのであり、それが「超国家主義」化に向かふのは当然であり、その「理論的学問的根拠」のために古事記はもとより、内外の「超古代文献（偽書）」は動員されなければならなかつたのである。」（同四三ページ）

(2) とりわけ筆者の研究対象である大國隆正に関しては、大崎勝澄『大國隆正』（大日本雄辯會講談社、昭和一八年）、大月隆杖『天皇信仰の首唱者大國隆正』（産業経済社、昭和一七年）、岡田實『大國隆正』（地人書館、昭和一九年）などがある。

(3) 白井裕之は「国際派からオカルト・ナシヨナリストへ」藤澤親雄の足跡を追う（『日本エスベラント学会紀要』第四号、二〇一〇年）において国際派として知られた藤澤が「右派」へ転向し、その後「オカルト的学説」を展開していく藤澤の学問の「足跡」を戦後の活動まで視野を広げ、考察を試みている。白井は藤澤の学問的変転を西洋への劣等感から変じた、日本の優越性において生まれたものとみなしている。藤澤のオカルト・ナシヨナリストなるものを一言で要約するに、白井の言葉を借りれば「強引に日本の優越性を証明しようとしたからこそ、オカルト的な学説にまで手を出すことになつたのではないだろうか」としている。白井の視点は、藤澤が当初より、「超国家主義的」な理論を展開したものではないことを、海外経験の視点から論じているが、藤澤の著作の考察までは言及されていない。藤澤が著作において、当初より突飛な「超国家主義」論を展開した訳ではない事を理解していないと、白井も引用する『創造的日本学』（小見山登編、日本文化連合会、昭和三九年）に所収されている難波田春夫の随想の如く「縦横無尽にいろいろのことが雑然と延べられているだけ」（二五〇頁）という感想に陥りがちとなろう。

(4) 一例をあげると、南博が監修した、明治以降から昭和二〇年の敗戦までに出版され、絶版となつている南の説く、「日本人論」についての論考を復刻した『叢書 日本人論』二二に藤澤の『日本的思惟の諸問題』が所収されている。（大空社、平成九年）この解説が一般的な藤澤評の好例といえよう。解説の冒頭で、南は藤澤とその著作を「著者は、九州大学で政治学の教授をつとめ、昭和年代に日本国体論にもとづく日本精神論を唱えた、皇室中心主義者である。本書はその評論集であり、昭和一六（一九四一）年の六月、日米開戦の半年前に刊行され、日本ファシズムの代表的な擁護論となつている」と藤澤の履歴と思想を挙げ、挙句は「博学な著者が、ファシズムの代弁者として、知識を非論理的にふりまわした著書である」と酷評している。後述するが、そもそも藤澤は「ファシズム」自体を肯定も「代弁」もしないことは、著作を通して見れば明らかである。また、南のいう「文化」の概念は精神文化と物質文化に分け、物質文

化の発展を「文明」とすることが「常識」であるとし、藤澤の意見が読者を混乱させると論じているが、なぜ藤澤が政治思想を語るにあたって精神的「文化」と「文明」について使い分けたかについて南自身詳細な言及はなく、解説を読む者を混乱させる。

(5) 戦後公職追放解除後は芝浦工業大学・日本大学・国士舘大学教授を歴任。昭和三七（一九六二）年七月二三日逝去、享年六九歳。他に、『神道人名辞典』（神社新報社、昭和三〇年）から戦後神社本庁参与として活動したことが知られる。また、藤澤の神道人としての活動は藤澤親雄『神道アツピールの旅―北南米知識層の反響』（神社本庁、昭和三四年）などを参照のこと。なお、藤澤の遺稿や諸家追悼・随想録が収録されている、小見山登編『創造的日本学』（日本文学連合会、昭和三九年）の「経歴年譜抄」も参照のこと。

(6) これは先述したように、筆者の主たる研究対象である大國隆正の音義学や神観念を取り入れた世界観を形成しているところに、近代日本思想における大國隆正の位置が見える一例として好適なのである。例えば、「産霊」や「造化三神」の捉え方、位置づけが、藤澤が展開する日本という国柄を説明することにおいて非常に重要な位置を占めるものであると筆者は考えている。

(7) 『全体主義と皇道』（東洋図書、昭和一五年）、『世紀の預言』（偕成社、昭和一七年）、などに詳しい。『全体主義と皇道』では西洋的国際法の欠陥を挙げ、大國隆正の著作である『新眞公法論』を引用し次のように述べている。

明治維新の隠れたる功勞者として、其の思想的確立に重大なる寄与をなした天才的國學者、大國隆正は、萬國平等の西洋流形式國際法の根本的欠陥を深く認識し、「生みたる」元靈的一者と、それから「生まれたる」分靈的多者との間に當然存在すべき上下立體の宇宙自然的關係に基き、日本的にして而も同時に世界的に普遍すべき新たな國際公法を樹立すべきことを力説してゐる。隆正は、その雄著「新眞公法論」に於て

「日本にてアメノミナカヌシの神（天之御中主神）と云ひ傳へたる神靈は、正しく西洋地方にては天主と云ふもの、支那にては上帝天帝などと云ふものにして、その次のタカミムスビノ神（高御靈神）カミムスビノ神（神御靈神）と云ひ傳へたるは、支那にて造物者と云ふものなり。その上帝造物者がイザナギノミコト（伊弉那諾命）イザナミノミコト（伊弉那冊命）に課せて、萬國を生み出さしめ給へり。イザナギノミコトと云ふは、地球の精靈假りに人の男の形を現はし、天上萬物の種子を下界に下し給へり。イザナミノミコトと云ふは、地球の精靈假りに人の女の

形を現はし萬國を初めとし、萬物を此の地球上に生み出し給へり。初めに萬國を生み、後に日本國を生み給へり。初めに生み給へる萬國は女人先言と云ひて、下剋上の國なり。後に生み給へる日本國は改言と云ひて、上生下の國なり。之れに依り萬國はその王統定まらず、日本は神代より皇統違はせ給はず、之れに依り日本を本とし尊とし萬國を末とし卑しとするなり。これは、我が日本の古傳にて、其の後年を追ひ、日を追ひ、その徴つきつぎに現はれて、支那人の中華と誇り、夷狄と賤しむる類にあらず。之れに依り我等は我が日本の古説を眞の公法とし西洋に造られたる公法を眞の公法とは思はざるなり。」

更に隆正は、自由主義イデオロギーに立脚する西洋流國際法が、各國家を形式的平等の存在として取り扱つてゐることに反對し、國家間には、實質的なる差等的順位が存立してゐなければならないことを力説してゐる。結局、隆正は我が日本が、世界最高の道義國家であることを、「さて、その萬國の中に、只日本國の天皇のみ神代より皇統を傳へおはしますなり。されば、此の日本國の天皇を世界の總王として、萬國より仰ぎ奉ること誠に理の當然なりと述べている。(一五七—一五八頁)

加えて藤澤は「我國の優れたる思想家は、何れも、皇國の宇宙的生命に對し、大國隆正と同様な信念を懷いてゐる。」(一六〇頁)として佐藤信淵の『混同秘策』や平田篤胤の『古道大意』を引用している。藤澤の理想とする政治と、日本の使命が隆正の思想を基底となすことがうかがえる興味深い内容といえよう。

(8) 大谷伸治「藤澤親雄の『日本政治学』——矢部貞治の衆民政論に對する批判を手がかりに——(『北海道大学大学院文学研究科研究論集』11号、平成二三年。)

(9) 今井隆太「国民精神文化研究所における危機の学問的要請と応答の試み」(『ソシオサイエンス』第七号、平成二三年。)

(10) 前掲大谷論文一〇頁を参照。

(11) 『西歐近代思想と日本國體』の初出は思想問題小輯四として文部省から非売品として出版されたものであり、本稿では文部省発行のものを参照した。その後、一般に向けて販売されたものが昭和九年二月二五日に日本文化協会から出版されている。

(12) 同一頁。

(13) 藤澤が理想とする政治のあり方については、表現こそ著作によって多少の変化が見られるものの、基本的概念は変わることなく一貫している。例えば、平易な講演録である『皇道政治学概論』(藤澤親雄述、大東文化協会、昭和八年八月)

- でも、「家族の基本的道徳たる「孝」と國家の基本的道徳たる「忠」とが最も自然に一致するのであります。それ故忠孝一致は我が國體の本義になるわけでありませう。即ち之を詳言しますると純眞なる親と子の愛たる孝がそのまゝに擴充せられて臣民が天皇に對する至誠の情緒たる忠となるのであります。」(一頁―二頁)と語っている。この天皇を中心とした家族的国家体制がその後の藤澤の国体論・皇道論の基本となつていくのであるが、詳細な検討は後稿を期したい。
- (14) 『西歐近代思想と日本國體』二二六頁。
- (15) 同三〇頁。
- (16) 同三〇―三一頁。
- (17) 同四四―四五頁。
- (18) 同三三頁。
- (19) 同三四頁。
- (20) 同三四―三五頁。
- (21) 藤澤は抽象的遊離人を宗教的なるものから引き離してしまふことに近代主義の根本的な問題点があることを指摘している。特にボルシェイズムに関しては「：人間生活が經濟的環境並に生産關係によつて制約せられると説くマルクス主義が、現代人の關心を大いにそつた事は無理もない事である。」(同五一頁)とマルクス主義の流行する要因を整理しているが、天なる宗教、或いは神を否定し天と人とを引き離してしまつた事を「：餘りに經濟的なものに捉はれ結局我々の求める最後の理想より、離れてゐるものである。」(同頁)と締めくくっている。
- (22) 『西歐近代思想と日本國體』、三五頁。
- (23) 同三七頁。
- (24) イタリアの詩人ガブリエレ・ダヌンツィオが指揮をとつたクロアチア領リエカを巡つた領土問題の事を指していると思われる。ダヌンツィオは第一次世界大戦において戦勝国としてのイタリアの権利主張を訴えた人物としても知られ、ベニト・ムッソリーニに影響を与えた「ファシズム」の先駆者とも評される人物であるが、藤澤は「ボルシェイズムの無統制状態」として評価をしていない所などは、藤澤は単なる「ファシズム」の肯定者ではないことを表している。
- (25) 『西歐近代思想と日本國體』、三八頁。
- (26) 同四二頁。

- (27) 註26に同じ。
- (28) 同四三―四四頁を参照。
- (29) 同五二―五三頁。
- (30) 同五四頁。
- (31) 註31に同じ。
- (32) 同六四頁。
- (33) 同六六頁を参照。
- (34) 青年教育普及会、昭和一〇年三月。
- (35) 『近代政治思想と皇道』、五一頁。
- (36) 同五二―五三頁を参照。
- (37) 同五五頁。
- (38) 同五五―五六頁。
- (39) 同六三―九二頁。
- (40) 他にも藤澤は天皇とヒトラーを比較して、ヒトラーがどのような努力を払ったとしてもドイツにおける「真の王者」たる資格を持つことにはなりえないことを示唆している。すなわち、「ヒトラー治下に於けるドイツ人は眞の意味に於ける自由を完全に享受してゐるわけではなく、そこには相當霸道的色彩が強く働いてゐるものと言はなければならぬ。又我が國に於いては皇位は肇國の始めより絶対に確立し、萬世一系の天皇のみが國家最高權威者であらせられる。然るにヒトラーの享有する權威の基礎は極めて薄弱であり何時打倒さるゝやも測り難い。畏くも我が國の天皇は現人神として國民全體の宗教的信仰の對象であらせられる。之に反してヒトラーの如きは單なる一人間であつて如何協力を擁するもドイツ國民全體の信仰の對象となる事は出来ない。」(同九六―九七頁) この観点はファシズムにおける指導者(II Duce)の弱点を指摘した内容に類似する。この点からも、藤澤が天なるものと地なるものが有機的に人と結ばれる社会を理想としていたことがうかがえる。
- (41) 『近代政治思想と皇道』、九二―三頁を参照。
- (42) 同九四―九五頁。

- (43) 『日本的思惟の諸問題』、一九頁―二〇頁を参照。
- (44) このように「語釈」を頼りに万物を読み解く一音一義的な解釈の方法は、藤澤が挙げた平田派の国学者である林甕臣のみならず、大國隆正も『音図神解』や『古伝通解』など多くの著作で試みている。
- (45) 『日本的思惟の諸問題』、二二頁―二三頁。
- (46) 同五九頁。この造化三神の思想はかつて大國隆正が述べた宇宙観・世界観と酷似している。隆正は天之御中主神は万物全てに宿り、森羅万象全ての中点をなす存在であると、『神理一貫書』（野村伝四郎編『大國隆正全集 第五卷』、有光社、昭和一四年）など数多くの著作において論じており、生涯一貫していた。大國隆正の述べる神観念については拙稿「大國隆正の神観念についての一考察」（『研究開発推進機構紀要』第6号、平成二六年）を参照のこと。
- (47) 国際連盟について藤澤は「今日日本が脱退するの已むなきに到つた國際聯盟の如きは、非本然的倫理生活のみを知つて、眞の意味に於ける人間の倫理性を認識せざるマン（ここで用いている「マン」(Man)とは、誰でもないが又誰でもある所の中性的存在と規定し、人格 (Person) と区別して藤澤は用いている―引用者註―) の組織であり、主張である。例えば、「漫然と世界の國際平和を説くだけでは、決して人類としての生活は安堵せられない。やはり、王者的な國民が深い倫理的關心から全人類のために責任を負ひ、世界を覺醒して行かねばならないのである。」（『西洋近代思想と日本國體』、二八頁）と述べる。国際連盟の説く平和は、藤澤にとつてマルクス主義的な世界主義的思想と大差なく、眞の國際平和に必要なものは、人間が持つ道徳的情操を涵養する民族精神や家族主義にこそあると力説する。この概念は藤澤の著作において一貫している。
- (48) 藤澤の「道」という概念は時代によつて解釈が都度付加されていく。当初は、道の字を分解し「レ」の字は「イ」と「止」で構成されるとし、そこに靈が宿る人体で最も重要な部位である「首」の三部で構成されると説く（『日本的思惟の諸問題』、八〇頁）。これを字義のみならず音義として解釈したものに、道＝「御血」の概念がある。藤澤は道の本義を次のように解釈する。「想ふに神ながらのみちとは御血であり我々の神秘的な生命の根源から湧き出で過去現在未来を貫いて不變に流れて行く民族の「神聖なる血液」を意味するものと存するのであります。」（『我が國體と世界新秩序』、昭和一六年四月三〇日発行、二頁）
- (49) この点について、藤澤は翼賛政治の國民に対する注意点として、『大政翼賛会実践綱領』の「今や世界の歴史的轉換期に直面し、八紘一字の顯現を國是とする皇國は、一億一心全能力を擧げて 天皇に歸一し奉り、物心一如の國家體制

を確立し、以て光輝ある世界の道義的指導者たらんとす」という一文をもって、翼賛体制における国民の政治に対するあり方は、時の政府を支持したり、時の総理大臣を翼成したりすることではないとしている。

(50) 『日本の思惟の諸問題』、八頁―九頁を参照。

(51) 『世紀の預言』、八―九頁。

(52) 同九頁。

(53) 同二二頁。

(54) 同二九頁。

(55) 同三三頁を参照。たとえば、考古学や民俗学に関しては、「古代民族にとつては生ける実在であり、太古の時代に生きた人々の人生に於る最高の規範が示されてゐる」ことから、民族精神の涵養には、古来の民族性を学問に見出すことも必要であると述べている。藤澤は、自ら民族精神の涵養する学問的実践として、「超古代」文献や歴史的事実を越えた神話学を展開して、理論を構築するようになったのではないかと筆者は推測する。藤澤の思想的画期の考察については後稿にて詳細に考察することとしたい。

(56) 同五四頁。

(57) 同四四頁。

(58) 同四七―四八頁。

(59) 同二八一頁。

(60) 同二六一頁。

【付記】 本稿は、國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター研究事業「昭和前期における神道・国学と社会」における研究成果の一部である。